大城ひかるのベトナム通信

シンチャオ（Xin chào）おきなわ

コロナ禍で越人の柔軟さ知る

封鎖された市場の前に座り地域を守る兵士たち（筆者撮影）

2021年にゼロコロナ政策を実施してきたベトナムでしたが、感染者は確実に増えていました。医療体制があまり整っていないため、感染者拡大は医療システムの崩壊に直結します。領事館からは「ローカルの病院は『野戦病院』と呼ばれ、日本人には過酷な環境であるから、感染しないように自分の身を守れ」という趣旨のメールをもらい、「野戦病院」という言葉に震えたものです。

ホーチミン市内は感染者数に応じて、赤橙黄緑の4つのゾーンに色分けされ、市民は移動が厳しく制限される赤から、比較的移動が自由な緑まで、自分の住む地域によって生活スタイルが異なっていました。私が住んでいる場所は黄色で、スーパーの店内に入れるのは5人までと制限されていました。日本人同僚のアパートには、買い物をしていい曜日が記された「配給券」が届きました。

クライマックスはロックダウン（都市封鎖）です。7月9日からの第一段階では社員全員が自宅勤務となり、無用の外出が厳しく制限されました。それでも、食料調達の移動は認められ、近くのスーパーでは入り口に置かれた注文シートに購入品目を書き込むと、店員が商品をそろえてくれるシステムになりました。野菜がしおれているとか、リンゴにキズがあるとかは目をつぶらざるを得ませんが、案外便利な方法でした。多少英語のできる店員がいたことや、学生が買い物代行を買って出てくれたおかげで、社会隔離の中でも私たち日本人は何とか日常生活を送ることができたのです。

軍を導入した本当に厳しいロックダウンがやってきたのは8月23日です。許可のない外出は一切禁止となり、家から絶対に外へ出てはいけないと言われました。同時にいつまで延長されるか分からないから、なるべく多くの食料を確保するようにとも聞かされました。ありがたいことに買い物に困るであろう日本人のため、会社がさまざまな食料を届けてくれました。そして静かで不気味な日々を過ごしたのです。最終的にロックダウンは9月30日まで続きました。

ほぼ3か月にわたる社会隔離でも感染者を抑えられなかったことから、政府はウィズコロナへと大きく舵を切りました。ロックダウン中に私たちは2回目のワクチン接種をし、10月下旬から一部の社員の自宅勤務が解かれました。ワクチン接種を進め、コロナとともに生きる生活に変わったのです。

コロナ禍をベトナムで過ごしてみて感じるのが、スピードと柔軟性です。物事がなかなか進まないように見えていても実は水面下で動いていて、決定後のスピード感にはいつも驚かされます。動きながら修正する柔軟さもあり、政府の方針がコロコロ変わるのも事態に臨機応変に対応していると言えるかもしれません。またそれに国民がうまく適応しているのは、その柔軟さからではないか――マスクをしなくなった学校で今、のんびり話すベトナム人を見ながら私はそんなことを考えています。

並ぶ経験の少ないベトナム人がスーパー入店のため列をなす（内海野花撮影）